

メディアに見られる「応援」の対象としての日本代表 —1984年から2008年のオリンピック大会に注目して—

A study of the national team of Japan featured by the media as an object of "support"
—Focusing on the Olympic games between 1984 and 2008—

スポーツ文化研究領域

5011A022-7 落合 佐和子

研究指導教員：石井 昌幸 准教授

はじめに

2011年、FIFA 女子サッカーワールドカップにおいて、なでしこジャパンは世界一となった。生中継された決勝戦は早朝の時間帯としては異例の高視聴率を記録した。オリンピックやサッカーのワールドカップなどのスポーツの国際大会において、日本人が日本代表を応援するという事に違和感を覚える人は少ないだろう。むしろ、日本代表戦を観るときほど、日本を意識する場面に私たちは日常で出くわすことはない、とすら言えるかもしれない。

そうしたスポーツの国際大会において日本代表を応援するという態度については、すでに、阿部や香山によって指摘がなされている。また、そうした大会は、多く場合、テレビによる観戦が行われ、私たちとスポーツの間には常にメディアが介在すると言うことができる。私たちはメディアによって描かれた日本代表を常に見ているのである。

本研究では、オリンピックを対象にして、メディアにおける日本人の描かれ方及びそこに存在する演出を見ることが、阿部や香山の指摘するスポーツの国際大会において、日本代表を応援するという態度がいつ頃から見られ、それらはどのように変化したのかということをも明らかにした。その上で、そうした態度が形作られる背景について、筆者なりの考察を加えた。

対象としたオリンピックは、84年ロサンゼルス大会を起点とする7つの連続した大会である。

第Ⅰ章

スポーツがメディアによって、どのように伝えられてきたのかという歴史の確認をしながら、比較の対象としての初期のスポーツ及びオリンピックへの理解を深めた。メディアの技術において、大きな差があるものの、戦前からスポーツは優秀なメディアコンテンツであったと言える。ラジオがメディアの中心であったころから、実況アナウンサーはその語りに工夫をこらしており、スポーツはメディアを介して伝えられるようになった当初から、少なからず演出を加えられていたと言うことができるだろう。新聞、ラジオ、テレビを通して伝えられるスポーツ、そしてオリンピックに人びとは熱狂した。

そうしたスポーツの人びとを惹きつける力は、1936年ベルリン大会において、ファシズムのプロパガンダとして利用された。また、オリンピックの舞台は戦後、東西陣営の代理戦争の場として利用されるようになった。そのため、オリンピックは、理想として政治とは無関係であることを掲げながらも、政治と深くかかわってきたと言える。そのため、戦前や東西冷戦下のオリンピック大会における自国選手の応援にはナショナルな影がちらつく。

しかし、近年では、一見するとこれまでのナショナリズムとは異なる日本代表を応援するという態度が指摘されている。今福は女子バレーボールの中継における、タレント応援団の起用や日本代表ばかりが映るテレビ中継を指し、もはや『『テレビ中継』ではない』と批判した。阿部は、現在のオリンピックにおいて、かつてのナショナリズムの論理はリアリティと実効性を失いつつあるとし、スポーツの語りにはかつてのナショナリズムとは異なるナショナルな物語が存在するとしている。香山は、日本代表を応援する現在の若者と戦争を経験した世代に共通する「屈託のなさ」を指摘し、それらに対して警鐘を鳴らした。そうした無意識に日本代表を応援するという態度は、学術的分野にとどまらず、広く認識されている。

第Ⅱ章

新聞やテレビを中心に、メディアにおいてオリンピックがどのように扱われたのかを見たることにより、前章で指摘された日本代表を応援するという態度の形成と発達の過程を明らかにした。

1. 新聞

『朝日新聞』、『読売新聞』の1面を対象に、その変化を見、以下の3つの特徴が明らかになった。1つは、「世界一よりも日本代表」という紙面に登場する日本代表選手の増加の傾向である。この変化は数量的にも明らかとなった。また、日本代表が決勝戦で敗れた際には、紙面に載る写真が、勝った世界一の相手を映したもののから、敗戦にうなだれる日本代表を映したもののへのシフトが見られた。

2つ目は、「オリンピックという歴史の中の日本」という点である。これは、同競技内はもちろん、まったく別の

競技であっても、日本代表という枠組みの中であたかも一続きの歴史であるかのように「日本がメダルを獲得するのは〇年ぶり」などと、語られるということである。これによって、私たちは応援してしかるべき対象としての日本代表という考えを、刷り込まれるのではないだろうか。

3つ目は、「選手個人の歴史」が記述されるようになった点である。もともと、新聞1面に載るオリンピック関連記事は、競技の簡単な記録を載せた報道と呼べるようなものであった。しかし、選手の話の掲載を経て、署名記事が登場するようになると、その様相は大きく変化した。選手の生い立ちから、競技での挫折、監督との関係に至るまでさまざまな物語が描かれるようになったのである。なお、ここで描かれた物語というのはだれもが理解し、共感し得るものであるだろう。これによって、私たちは選手を自己に近い存在として認識できるようになると考えられる。

2. テレビ

ここでは、実況や解説以外の形でオリンピック放送に関わり、テレビの画面に登場する人を「オリンピックタレント」と呼び、それらに期待される役割や、彼、彼女らが何を目指してオリンピックのテレビ放送に関わるのかということ进行を明らかにした。オリンピックタレントの初出は古く、88年ソウル大会時の長嶋茂雄まで遡る。当時の長嶋はプロ野球を引退していたが、その人気は強く、彼に期待された役割は「スター」の目から見たオリンピックを伝えるというものであったようである。彼の放送への取り組み方も、プロとしての意識が感じられる。

しかし、そうした視聴者と異なる立場から、オリンピックを伝えるという姿勢は、徐々に薄れていった。オリンピックタレントに求められる役割は、選手を「応援」すること選手の競技以外の部分の「エピソード」を伝えるということに変化するのである。これは、オリンピックタレントに起用された者の発言を見れば明らかである。自身が競技においては素人であると公言し、視聴者に一体となって「応援」しようと呼びかけるのである。これらは、新聞1面に見られた個人の歴史を伝えようとする態度と、同様もしくははきわめて似たものだと言えることができる。他にも、複数回にわたって登場するオリンピックタレントは、否が応でも以前の大会と関連付けられるものであり、オリンピックという歴史の枠組みがテレビにおいても、見られるのではないだろうか。

こうした演出は、高騰する放映権料を回収するために、少しでも高い視聴率をとろうとする放送局の考えによって生まれ、強化されていると考えられる。

第三章

前章において、阿部や香山の指摘した日本代表を応援す

るという態度の形成につながると考えられる特徴を見ることができ、それらの指摘は、正しいということが証明された。

つづいて、今まで見てきた特徴から、今回明らかとなった特徴をもとに、日本代表を応援するという視点から、ステージわけを行い、80年代、90年代、00年代という3つに分けることができた。

そうした日本代表を応援するという態度が、現代特有のものであるのかということ、ここで改めて検討した。坂上の指摘する戦前のオリンピックに「熱狂」する国民と、これまで見てきた日本代表を応援すると現在を生きる私たちとの間に、現象としての差異を見出すことは難しい。「ナチのプロパガンダに利用された」として悪名高い1936年ベルリン大会も、当時の人びとにとってはスポーツの祭典として純粋に楽しむことのできる場であったのかもしれない。

このような歴史的な認識をふまえつつも、戦前と現在の日本代表を応援するという態度の差異をあげるとするならば、それは圧倒的な情報量の差であるだろう。戦前の人びとは限られた情報から熱狂的に日本代表を応援することができたのである。そのため、日本人であるという意識や日本代表を応援するという態度が、オリンピックやスポーツの場面以外で形成されていたとすることができるのではないだろうか。対して、現在の人びとの態度は、メディアがより多くの人を惹きつけるためのある種の演出が行い、それによって形成されたものであると言えるのではないだろうか。オリンピックタレントもそうした演出の一例と言える。この点において、両者は大きく異なる。

しかし、注意しなければならないのは、有名人の「一緒に応援しよう」という単純で簡単な呼びかけによって、日本代表を熱狂的に応援する態度が形成されている点である。選手の物語についても、競技の素人が伝えることのできる程度の感動の物語で、喚起される日本代表を応援するという態度が生まれる土壌には、現在の私たちに無意識に潜むナショナルなものへの羨望があるのかもしれない。

終わりに

本研究では、目的であるスポーツの国際的なスポーツ大会において日本代表を応援するという態度を、メディアによるオリンピックの伝えられ方を見ることで、改めて確認し、それらの浸透を3つのステージにわけて説明することができた。しかし、根拠とする資料が不十分であり、今回明らかになった傾向やステージわけを理論として確固としたものにするためには、さらなる研究がのぞまれる。